

## 「家族外コミュニティ」の教育効果：高校寮生活経験者へのインタビュー調査をもとに

著者	綿引 伴子, 中田 淳平
雑誌名	教育実践研究 = Studies in practical approaches to education
巻	36
号	September, 2010
ページ	1-18
発行年	2010-09-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/25815">http://hdl.handle.net/2297/25815</a>

## 「家族外コミュニティ」の教育効果 —高校寮生活経験者へのインタビュー調査をもとに—

The educational effect of “community outside family (community which has alternative function of family)”

: Interview with people who have spent at a dormitory when they were high school students

綿引 伴子  
Tomoko WATAHIKI

中田 淳平  
Junpei NAKADA

### I 家庭教育と子ども

#### 1 家庭教育をめぐる現状

現代の教育政策における家庭の教育力という言葉の使用は、1984年から1987年の臨時教育審議会の議論で「家庭の教育力の低下」が指摘されたことに端を発する<sup>1)</sup>。本田によれば、1990年代以降、政策的・社会的に家庭教育に対する関心が高まっている<sup>2)</sup>。

1990年代後半から家庭教育への政策的介入が強力に推進されるようになった理由を、「家庭は教育の原点であり、すべての教育の出発点である。」で始まる2003年3月の中央教育審議会答申では、家庭教育の機能の低下によって、子どもの生活習慣やマナー、思いやり、モラルなどが低下しているのが、家庭教育の担い手である親のあり方をまず正し、家庭教育の機能を充実させることが必要であると述べている。家庭が、子どもの社会化の主体として政策的に重要視されていると言える。

また、2000年代に入って『プレジデントFamily』や『Edu』など、ビジネス系雑誌が家庭教育にターゲットを絞って新たな雑誌を創刊し、売れ行きを伸ばしている。雑誌による方向性の違いはあるものの、いずれも、主体には家庭や親が想定されており、子どもの社会化も含んだ広義の学力を子どもに身につけさせることに関心をよせている<sup>3)</sup>。

#### 2 「教育家族」と問題行動を起こす子どものメンタリティ

近年の子どもの問題行動においては、親が教育への関心が高く家庭の経済状態も普通以上、両親に育てられており学力においても問題がなく、親自身も非行の原因がよくわからないといったケースが増えている。その原因として、家庭がよかれと思いい子どもに教育指導を行い、結果的に子どもに押し付けてしまうような「教育家族<sup>注1)</sup>」になっていることが挙げられる<sup>4)</sup>。教育家族に関しては、「今ほど家族の結びつきの強い時代はないし、親が子どもの教育に全面的にかかわる時代はない。」と、広田も指摘するところである<sup>5)</sup>。現代の家庭の教育力は低下しているとの認識から、家庭の教育力の低下と少年の犯罪の増加の関連とを関連付けるロジックがある。しかしその関連性は否定されている<sup>6)</sup>。

現在の家庭の教育力は低下しているどころか、昔の家庭での教育とくらべるとより細やかな配慮をするようになってきており、新たな問題はそこから生じている。親と子の過度な癒着や、親から子への過度な期待から、キレたりバーンアウトしたりなどの問題が起きている。1980年に起きた「金属バット殺人事件」では、父親が教育熱心であったことが、子どもの両親殺害という犯行の動機だったと言われている<sup>7)</sup>。

近年増加している子どもによる親や祖父母の

殺害事件にも、同様の背景があると考えられる。2008年に埼玉県川口市で起きた中三女子による父親刺殺事件は、端から見ると何の問題もない典型的な「いい子」が親を刺殺した事件であったと言える。犯行理由は期末試験の成績が悪くなったことであり、親の期待を裏切らないように親を殺し、その後自分も自殺しようと思った。この少女は「家には自分の居場所がない」と告白しており、親の目を盗んではシンナー吸引を繰り返していた。「いい子」の仮面をかぶり緊張を強いられる日々の生活の中ではいつかは必ず限界がくるものであるが、この少女に限らず、限界すれすれまで我慢をしている子どもたちが案外多いという現実をもっと認識する必要があると須永は指摘している<sup>8)</sup>。

ただし、資源のない家庭ではむしろネグレクトや虐待が問題化しており、教育家族の問題点は比較的経済的に安定している家族にいえることである。

## II 家族外コミュニティ

「コミュニティ」とは、アメリカのマッキーバーが提唱した概念で、日本では「共同体」と訳され、今日では「地域社会」と訳されることもあるが、地域性を必ずしも伴うわけではない<sup>9)</sup>。地域性を伴わないコミュニティとして、目的型コミュニティやバーチャル・コミュニティなどの例がある。本論文でコミュニティという際には、必ずしも地域性を伴うわけではない「共同体」としての意味で用いる。家族も1つのコミュニティとしてとらえる。

今日の日本では家庭が子どもに責任を持つべきだという規範が強いが、責任の全てを引き受けることが困難な家庭は少なくない。仮に責任を全て引き受けることができたとしても、それで問題が生じないということではない。今日の社会で家庭の機能や責任とされていることを代替しうるコミュニティを、本研究では「家族外コミュニティ」と言う。例えば石川県七尾市のカンガルーハウス<sup>注2)</sup>や、加賀市のはづちを楽

堂<sup>注3)</sup>、三重県鳥羽市の寝宿<sup>注4)</sup>、千葉県秋津市立習志野小学校の秋津コミュニティ<sup>注5)</sup>を挙げることができる。家族外コミュニティは、家庭では担いきれない機能を家庭の外部に求めることによって、閉塞した家族から開かれた家族を創造する可能性をもっている。

## III 研究の目的と方法

### 1 研究の目的

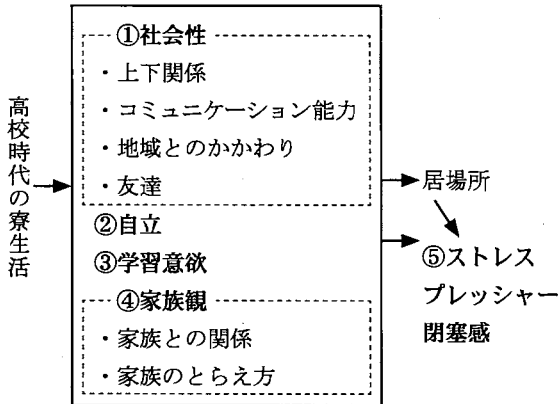
以上述べたように、子どもに対する家庭教育が重要視されている現状であるが、むしろ教育やしつけを家庭に一身にゆだねることで問題が生じている。家族外コミュニティへと家庭教育や家庭の機能を開いていくことが、親子関係や子どもの現状改善にとって重要であると考えられる。子どもは、家族外コミュニティをもつことによって社会性を身につける機会が増えたり、時間的・空間的に親との過度な癒着から離れたりすることができるのではないかと考えられる。

本研究では石川県七尾市の清栄寮を一つの家族外コミュニティとして注目する。清栄寮という家族外コミュニティが当事者である子どもにどのような影響を与え、教育効果をもたらしたかを明らかにし、家族外コミュニティの可能性について検討することを目的とする。親にとっての家族外コミュニティの有効性は別稿で論じる<sup>10)</sup>。

### 2 仮説

1の目的に対して、清栄寮での寮生活が子どもにも与える影響として5つの仮説を立てた(図)。

清栄寮は子ども14人と寮を運営する上野さん夫婦が生活しているため、多くの人間と触れ合う機会がある。一つ目は、多様な人間とのかかわりは子どもの社会性を育むのではないかと考えた。答志の寝屋子では宿子同士が親密な人間関係を作り上げていたように、清栄寮でも友達同士が親密な人間関係を形成している可能性が



対象者	年齢	学年(大学)
A	20	2年生
B	22	4年生
C	21	3年生
D	20	2年生
E	22	4年生

ある。ただし、寮には七尾高校生が多いことから、共有できるのは同質な文化に限られる。清栄寮というコミュニティで社会性を獲得できれば、結果的に自分の居場所を感じることもできるのではないかと考える。

二つ目は、掃除や洗濯といった生活的な自立や、親から離れて生活するという精神的な自立を促すのではないかと考えられる。

三つ目は学習意欲の向上である。七尾高校は進学校であり、ほとんどの生徒が四年生大学を受験する。寮では大学進学という同じ目標を志す子どもたちが集まっていることで、学び合う姿勢が育まれるのではないかと考えた。先輩が勉強する姿を見ることや、後輩に勉強を教えることで、勉強や受験に対しての意欲が高まると考えられる。

四つ目は、親から離れて生活することで家族観が変化するのではないかと考えられる。

五つ目は、家族観の変化と自分の居場所だと感じられるコミュニティが広がることによって、家庭という狭いコミュニティからの解放感を得ることができるのではないかと考えられる。

### 3 調査方法

#### (1) 調査対象者

2003年～2008年、石川県立七尾高等学校在学中に清栄寮で下宿生活を行い、現在四年制大学在学中の以下の5名を調査対象者とした。

Aはソフトテニス部、BとCは空手部、Dはバスケット部に所属しており土日も含めて毎日部活があった。Eは1年の途中まで空手部に所属していたが、その後部活動は行わなかった。Aは実家には1月に1回程度帰り、親は週1回程度寮に来た。Bは実家には2～3ヶ月に1回程度帰り、親はほとんど寮に来なかった。Cは実家には1ヶ月に1～2回程度帰り、親は1ヶ月1回程度寮に来た。Dは実家には半年に1～2回程度帰り、親は2～3ヶ月に1回程度寮に来た。Eは毎週実家に帰っており、毎週洗濯物を持ち帰っていたが、E以外は自分で洗濯していた。Cは親が来たときに、親が部屋の掃除をしていたが、C以外は自分で掃除をしていた。Dは朝6時に起床して部活の朝練習に出かけるなど生活の自己管理がよりできていた。5人も国立大学への進学を目指していた。

#### (2) 調査時期と調査方法

2009年9月～2010年1月。

上記5名の対象者に対し、面接による聞き取り調査を行った（1人につき30分～1時間30分）。テープに録音し、それを活字に起こしたものを基礎データとする。

#### (3) 調査内容

- ・帰ってから寝るまでの過ごし方
- ・友だちとの会話の内容
- ・先輩や後輩の存在
- ・寮はどのような場所か
- ・家族のとらえ方（Family Identity、家族と認識する範囲）の変化
- ・家族に抱く感情の変化
- ・親元を離れてよかったこと・悪かったこと

- ・寮の地区への所属意識
- ・勉強・受験に関して寮生活をしていてよかったこと
- ・自立できたと感じること
- ・3年間寮で過ごした経験の意味

#### 4 清栄寮の概要

現在七尾市には、七尾高校、七尾東雲高校（旧七尾工業高校、七尾農業高校、七尾商業高校）、中島高校（旧中島町）、田鶴浜高校（旧田鶴浜町）の公立高校4校と鵬高校という私立高校1校がある。高校生が七尾市内で寮生活を行うとき、ほとんどはこれらの高校のどこかに通学している。七尾高校周辺にはおよそ5寮あり、それぞれの寮が男女別に生徒を募集している。学校が寮を斡旋するのではなく、親がそれぞれ知人などを通じて紹介してもらう。所属高校別では七尾高校の生徒が多いが、田鶴浜高校での看護・介護や、七尾東雲高校でのスポーツの勉強をする生徒などもある。寮生の出身地は輪島市（旧輪島市、門前町）や能登町（旧能登町、内浦町、柳田村）など奥能登がほとんどであり、まれに加賀地区からの生徒もいる。

清栄寮は七尾市内の寮の1つであり、上野さん夫婦が1977年から経営している男子寮である。1人につき部屋が1室与えられ、1棟で最大14人が寮生活を送ることができる。他の寮に比べると規模が大きい。寮費は食事代を含めて55,000円/月で、それに加えて電気代のみ各部屋で使った分を別料金で支払う。寮生たちは、上野さん夫婦のことを「おじちゃん」「おばちゃん」と呼ぶ。

部屋は一室四畳半で、玄関の上に位置する二部屋だけは、四畳半より少し広い長方形となっている。全て和室で畳が敷かれ、1間の押入れがついている。部屋には最初から置かれている物は何もなく、入居時に必要なものを購入して持ち込む。冷暖房器具は備え付けられておらず、夏は扇風機、冬は電気カーペットや電気ストーブなどを持参して、各自部屋の温度を調節

する。自分の部屋に友達を呼ぶことはできるが、その際は必ず上野さんに挨拶してから上げることが規則となっている。

食事は、平日や補習のある土曜日には上野さんが用意するが、休日に食事は出ない。朝食はバイキング形式で6時頃から用意され、昼は弁当が作られ渡される。夕食は18時30分頃に用意され、学校から帰ってきた者から順番に食べる。朝食や夕食を食べる場所は1階にある食堂である。休日には実家へ帰省する者もいるが、部活動をしている者などは休日でも寮で過ごすことになる。休日は食事が出ないために、インスタント食品などを食べたり、近くのスーパーで惣菜を購入したり、ときには外食をしたりする。

テレビは、共同のテレビが食堂に1台置かれている。テレビを個人的に部屋に持ち込むことはできるが、持ち込む者はほとんどいない。本調査の対象者では、自室にテレビを持ち込んだ者はいなかった。

トイレや風呂は共同である。風呂は、平日は17時頃から準備され、帰ってきた者から順番に入る。一度に2人一緒に入れるようになっていて、仲がよい者同士なら3、4人一緒に入る場合もある。22時までには全員が風呂に入らなければいけないことになっているので、風呂の前で順番に列を作って待つこともある。休日には風呂は沸かされないため、風呂に入りたい者は寮から自転車で7～8分の銭湯に行く。

洗濯は各自でやることになっている。1回200円のコイン式洗濯機が1つあり、それを使って洗濯する。洗濯物は、玄関か2階の1室、または自分の部屋に干す。洗濯竿は用意されているが、ハンガーなどは各自で用意する。

消灯時刻や起床時刻は特に決まっておらず、自己責任で寝たり起きたりする。体の調子が悪いときなどは自分で病院に行くか、それができないときには上野さんが病院へ連れて行く。

親は週末などに子どもの様子を見に来たり、実家への送り迎えをしたりする際に寮に来る。

頻度は家庭によって異なり、ほぼ毎週来る親もいれば、月に1回や数ヶ月に1回程度の親もいる。

調査対象者が寮にいた5年間では、田鶴浜高校の生徒1人が、看護実習とともに病院近くのアパートに引っ越し、それを除けば退寮者は1名である。

#### IV 調査の結果と考察

聞き取り結果から、以下に示す1～10に関連する記述を抜き出し考察する。「」内はインタビュー、「( )」内はインタビューアの話した内容を活字に起したものである。内容理解のため著者が補った部分を( )で加筆した。

##### 1 上下関係(礼儀、挨拶、言葉づかい)

- A「(挨拶で気をつけたことはありますか。)できるだけ聞こえるように。聞こえなかったら意味ないんで。先輩には自分から言うようにしました。」「上下関係はやっぱ教えてもらったりっていうか。」「言葉づかいもやっぱり。高校の下宿来て。」
- B「お風呂とかの順番は気を遣った。でもあんまり厳しくなかった。」「自分が後輩のときは自分からしてたね。先輩になってからは後輩が言うのを待っていたかも。でも挨拶しろよっていうふうに言ったことはないかも。」
- C「どちらかという僕たちの寮は厳しい寮ではなかったですよ。」「あいさつは、でもどうでしたかね。おはよう、おやすみなさいくらいはしてた気がしますね。特に朝は、おはようございますって言ってたと思うんですけどね、確か。」
- E「あんまり意識しなかったけど、風呂入る順番とかは先輩優先って感じで、自分で考えた。」

風呂は2人ずつしか入れないため、BやEは先輩を優先するように心がけている。挨拶では、AやBのように先輩に対しては自分から挨拶をしており、Bは自分が先輩になったときに

は、後輩から挨拶するのを待っている。Cはどちらから挨拶をするかということに関しては特に意識していなかったが、挨拶自体をしないとすることはなかった。言葉づかいについては、Aは寮に来てから学んだと述べている。

以上から、清栄寮での寮生活では、先輩や上野さんから厳しい指導を受けることはなかったが、各自先輩に気を遣いながら生活し上下関係を学ぶことができたといえる。

##### 2 コミュニケーション能力

- A「たぶん中学校から礼儀とかも変わらずに適当な感じで、人ともそんなに腹割って話し合うっていうのが…人に溶け込みづらくなるっていうか…。なかなか心を開かないみたいになって、人との交流ができなかったかなって思います。(じゃあコミュニケーションは上がったということですか?) ああそれですね。かなり上がったと思います。」
- B「コミュニケーション能力も多少はついたかな。親だったらあっちが気を遣ってくれるけど、友達どうしだったらいかに自分をわかってもらえるかっていうのが大切だし。親なら話ふってくれるし楽だった。」
- C「多少なりコミュニケーション能力ですか。その一、常に家にいて、寮に戻ってもやっぱり数人の普通に血のつながってない人間がいる中で生活するわけなんで、必然的にコミュニケーションはもろんとるわけですし、そういう力が、多少なりは養えたんですかね。」
- D「テレビを見る時間は確かに面白いですけど、そこまで有意義な時間だとは…。それよりは友達としゃべったりするほうが有意義だっていうか…。」

ABCは、コミュニケーション能力がついたのではないかと振り返っている。Aは腹をわけては話すことができ、人との交流を持たたということからコミュニケーション能力がかなり上がったのではないかと考えている。BとCは、

家族のなかでは家族が気を遣ってくれるが、寮では他人と会話をしなくてはならないので、友達と理解しあうために考えたり自分からかかわったりしたことから、コミュニケーション能力が養えたのではないかと考えている。

Dは、直接コミュニケーション能力が向上したとは述べていないが、テレビを見るよりは「友達としゃべってたりするほうが有意義」だと振り返っており、友達との会話を重要視していた。

以上から、清栄寮での寮生活はコミュニケーション能力を向上させることことにプラスに作用したと考えられる。

### 3 地域とのかかわり

A「(寮に入って、寮の地区の人たちとの関わりってというのはありましたか。) ないですね。たまにうるさいって怒られたくらいで。ほかには全くないですね。」「話せたほうが、下宿から帰ってきたときに「おかえり」「あ〜こんにちは」みたいなやりとりがあったほうが、あたたかさがあって…。そういうのが地元にはあるので、あったほうがいいと思います。」

B「(寮に入ったことで地域とのつながりはありましたか。) 近くの家の人とは挨拶くらいはしてた。それくらいかな。(もっと地域に入りたかったですか。) そんなことはないかな。あんまりべったりはしたくなかったし。」

C「(地区の人とのかかわりってありましたか。) 僕はなかったですね。全くなかったですね。」「当時の高校生の自分を考えると、かかわれるのならかかわりたいと思いますね。まあ今だから思えることかもしれないですけど、一期一会じゃないですけど、いろんな出会いがあって、それが自分の身になると思うんで大切にしていきたいなという思いはあるので、当時を振り返ってみても、かかわれたら今の自分とはちょっと違ったあれに

なっていたのかなって。」

D「(寮に入って寮の地域の人たちとのかかわりにはありましたか。) ないです。」「(もし地域の人たちとかわれたらかわりをもとうとしましたか。) その当時だったらしないですね。その現状で十分精神的に満たされたというかなんというか。新しいものを求める必要性はなかったっていうか。」

E「(地域の人とのかかわりってありましたか。) ない。(もしそういう地域の人たちとかわりをもてるとしたらもちたいなって思いますかね。) 全然思いません。(それはどうしてですか。) もったことで何が起るっていうわけでもなさそうだし。」

地域とのかかわりをもっていたのは「挨拶くらいはしていた」と述べるBのみで、他の4人はかかわりを全くもっていない。

もし地域の人たちとかわりをもてるものならもちたかったかという質問に対しては、AとCはせっかくならかかわりをもちたかったと述べており、Aは実家の地元では地域とのかかわりがあったから地域とのかかわりをもちたかった、Cは一期一会を大切にしたいという理由であった。他の3人は特に地域とのかかわりをもちたいとは思っていなかった。Bはべったりしなくなかったから、Dは十分に精神的に満たされていたから、Eはかかわりをもったところで特に何かが起こるというわけではなさそうだからという理由であった。

以上から、清栄寮での寮生活は、寮生が地域との結びつきをもつことには影響を与えておらず、地域との結びつきをもちたいという意識に対しても特に影響を与えていないと考えられる。

### 4 友達関係

A「学校にいるときは、授業のことについて、たまにはわからんこととかやったら聞いたり、そうじゃなかったら授業で先生が言ったおもしろいことを掘り起こして笑うみたいなの…。そういう集団って寮では4人とか5人で

すけど、学校では10人くらいで、わーって規模が大きい感じでしたね。(反対に寮では日常生活の会話であったり、他にあったりしますか？具体的な会話の内容で。) 会話は、下ネタであったり…(恋の話とかは?) 恋の話…。あっ恋の話ありましたねー!! てかむしろそれが多かったですね。恋の話ありましたねー。そういう相談もありました。あとは…学校で腹たつたしとか愚痴を聞いてもらう感じで。学校ではさすがにできなかつたけど、下宿ならできましたね。」

B「いつも一緒にいるやつとなら、帰ってきて20時にご飯を食べ終えて、そのあとずっと一緒にいて寝るまでずっとだから、3・4時間は一緒にいたね。」「(友達との距離感にちがいはありましたか。) 寮のほうは家族みたいな感じだね。」「(寮で暮らしたことはどのような意味がありましたか。) 一生の友達ができた。いつも一緒にいた友達は中学までは嫌いだったけど、寮にきたら仲良くなれた。夜語りあったりしていろんな価値観に会えた。めったにできない経験が毎日できた。」

C「誰かの部屋に行って、集まって、話していることが多かったですかね。そういう他愛もない、今考えると特別たいしたことじゃないんですけど、そういうことが多かったかなあと思いますね。」「やっぱり寮の友達とかのほうが、その一、学校の友達はもちろん仲が悪いというわけではないですけど。ある意味その一、心の距離じゃないですけど、ざっくばらんに話せるところはありましたし。でも、…、先輩後輩かわらず寮生として一緒に住んでいたの、一つ屋根の下に暮らしているっていうのもあるんですけど、そういう意味では、学校の人間たちに比べて、近い部分っていうのもあったんですかね。」

D「(会話の内容は…)。えーと学校生活、それから世の中に対する不満…、それから…会話というよりは、冗談とか。趣味の話だったり。そんな感じですね。(相談ごととかがって

そういうのはあまりなかったですか。) 相談事は、まあ不安をぶつける感じで。相談というかたちではないと思うんですけど、不安を言い合ったりするうちに解消されていったりするって感じ。(友達は寮にもいて、学校の友達もいたと思うんですけど、そういうわけ方をすると、会話の違いとか内容の違いとかがありましたか。) そうですね。寮のほうが、何でもざっくばらんに話したというか。やっぱ深いっていうか、人間的な部分の話は、寮のほうが多かったと思います。」

「将来のことについて真剣に語り合える友達も高校になってからできたというか。(将来について語り合えるのは高校の友達?寮の友達?) 寮の友達。」

E「(じゃあ20時くらいには勉強始める感じですか。) まあ宿題やね。最低限の。でそれ終わったら、まあとりあえず12時くらいまで起きて遊ぶ。(何して遊びますかね。) ゲームです。(ゲーム。1人でゲームですか。) はい。」「(学校の友達と、寮の友達を比べて、自分の中で違いってありましたか。) 違い…。あんまりないかな。」

Aは「学校で腹たつたしとか愚痴を聞いてもらう感じで。学校ではさすがにできなかつたけど、下宿ならできましたね。」と、学校の友達とはできない内容の会話を寮の友達としている。Bは「夜語りあったりしていろんな価値観にあえた」「家族みたい」「一生の友達ができた」と述べている。Cは「心の距離」では「学校の友達に比べて、近い部分」があったと述べており、Dは「相談事は、まあ不安をぶつけて「不安を言い合っているうちに解消されていったりする。」「寮のほうが、何でもざっくばらんに話した」「深いっていうか、人間的な部分の話は、寮のほうが多かった。」「将来のことについて真剣に語り合える友達も」できたと述べている。

ABCDは帰ってきてからのほとんどの時間を友達と過ごし、冗談や他愛ない話、下ネタ、



学校での出来事、趣味、恋愛、将来のこと、不満相談など、気軽なものから深刻なものまで多岐にわたる。AやDの、不満や不安をぶつけ合うことができる相手は学校の友達ではなく寮の友達であった。A B C Dの発言から、学校の友達よりも寮の友達のほうがより親密であると言える。Eは友達と遊ぶよりは1人でゲームをする時間が多かった。Eは週末帰省することが多かったために、寮の友達と会話をしたり遊んだりする機会が少なかったことが影響していると考えられる。

以上から、E以外は、清栄寮での寮生活を通して、さまざまな話をし自分の内面を表出できる親密な友達をつくることができたと考えられる。

### 5 精神的、生活的な自立

A「(ありがたみを感じるようになったっていうのもあったんですけど、それまではありがたみを感じることもあまりなかったのですか?) そうですね。ぶっちゃけて言うとそこまで…。おって当たり前で、風呂とか洗濯もしてもらって当たり前で。してもらってしてもらってっていうので、そういうのが当たり前で、で下宿して、洗濯とかは1人でせんだめやし。」「掃除・洗濯を中学生のときは親に任せきりにしてたので、高校来て早いうちに下宿して、掃除・洗濯を自分でやらなくてはいけないという。でやってるうちに慣れてきて、大学生活もスムーズに。アパートに行ったら人がおらんくってさみしいなあくらいで。洗濯したり掃除したり、生活するうえで必要なことは高校のときからやっと思ったからスムーズに入れたし。」

B「自立したかった。精神的な自立。久しぶりに親に会うと、親がおじさん・おばさんみたいに思えて、その人たちにいいところみせたいし、心配されると大丈夫だよって虚勢をはっていた。とにかく依存したくなかった。家から離れていても上手くやっているという

ことをアピールしたかった。まあそこそこうまくいっていたから、根拠のない虚勢ではなかったかな。楽しかったし。」

C「悪影響かどうかはちょっとわかんないんですけど、ただいろんな意味で時間はとられたかもしれないですね。親元を離れると、例えば日常雑貨、生活雑貨を買いに行くにしても、僕らだとどっかに自転車で行くわけなんですけど、実家だと(親に)『あれ買ってきて、これ買ってきて』ってそんな部分があると思うんですけど、自分でやるが増えた分、その分時間が制約されていたかなと、思います。」

D「生活面、精神面、なんか何もかも家族にやっぱ、まわりとのコミュニティが、過疎地域だったぶん、それで他の共同体っていうか団体との接し方、他の存在との接し方、ある程度自立していくことを学べたり。」「(自立の部分で自分でこういうことができるようになったっていうのは…。) ああそうですね。まず起床。基本的な、何て言うんですかね、1人で生活していくための、例えば起床であったり、あと洗濯、生活必需に関することは大学でも学べたと思うんですけど、高校の時点で学べたのかなあと思いますし。やっぱ支えがなくなったり、叱責してくれる人間がいなくなった分、自分でプレーキを…。善悪を判断するというか、そういう部分が強く必要なんだと認識させられた。」

E「生活習慣は身についたかな。夜遅くまで起きててって感じ。(夜遅い生活に慣れた?) で朝は自分で起きれるって感じ。」

5人中5人が生活面での自立、BとDは精神的自立ができたと振り返っている。生活面での自立では、掃除や洗濯、日常雑貨や生活雑貨の購入、起床、時間管理などを5人がそれぞれに挙げている。対象者たちは、それまで“その程度”の家事もせずに家族と暮らしてきたし、寮生活をしなければ高校生になっても、“その程度”の家事をせずに生活していたと推察でき

る。この状況は、対象者のみならず日本の多くの中高生にもあてはまることだろう。平日は食事をつくってもらう環境ではあるが、今日の男子高校生の家事参加状況を考慮すると、休日の食事を選択・購入することや洗濯・掃除をすること、日常生活に必要な物の管理、時間管理は、自立につながるステップであると考えられる。

以上から、清栄寮での寮生活は自立、特に生活面での自立を促したと考えられる。

DやEが大学の1人暮らしでも学ぶことはできたと言うように、今挙げた自立に関することは高校の寮生活でしか学べないことではない。しかし大学での1人暮らしは、アパートでは食事や風呂も自分で用意する必要があり、寮生活に比べてより多くの自立すべきことが求められる。5人中3人が、高校で寮生活を体験したことにより大学での1人暮らしにはスムーズに入っていたと述べている。寮生活は大学での1人暮らしへのステップになっていると考えられる。

## 6 学習に対する意欲

A「夜に、ミスドとか行って、いつも1人とかやったら寝てしまうんですけど、ミスド行こうぜー!!とか言って勉強しに行ったり、勉強わからなかったら、もう即効分からんって言って勉強教えてもらったりできたんですよ。良かったですね。」「(後輩にアドバイスしたりとかってありましたか。)勉強は、がんばって予習をしたらいい感じになれると思うって(笑)。だけど俺は続かんかった。お前はがんばれて感じ(笑)。って確か入ってきたテニス部の後輩に…。」「(先輩の姿を見てよかったことってありましたか。)ひたすら大変そうやなって。あつても下宿の先輩はそこまで大変じゃなかったかもしれないんですけど。でもセンター前とか、大きいテストの前はやっぱりめっちゃ早起きしたりとかで、ちょっとは気遣うところもみんなあったと思うし、来年はおれらかーって言うこの気の沈

みっていうか。大変そうやなあって…。自己採点とかするじゃないですか。それ見とって、うわーって。来年大丈夫かなあって。でもそこで、俺2年の後期の成績良かったんですよ。それ(先輩の様子を)見とって。やべーって言って(笑)。センターとかあったじゃないですか。あれ見てやべーって思って、部活17時半くらいに終わって、本当に来年これやって思って、2年後期、冬くらいはめっちゃ成績よかったですよ。そしてそこから急降下です(笑)。」

B「先輩後輩では相談はなかった。後輩の部屋に行ったら勉強のアドバイスはしていたかも。模試の結果とか進路とかいろいろ。」「(先輩の受験の様子とか見てて、自分の受験でためになったこととかってありますか。)少し気が楽になったんじゃないかな。(自分が気が楽になったの? どうしてですか。)なんでやろうね。まわりの人がそういうのを経験しとるのを見とると気が楽にならん? プレッシャーになる人もおるかもしれんけど。」「そうそう。でも△△(友達の名前)としやべりながら勉強できたのはよかったと思うよ。斉藤孝とかも言っとったでしょ。勉強は1人ですもんじゃないって。(へー。それで頭に入るの?) うん入った入った。」

C「寮に来る人たちは勉強しようと思ってると思うんですけど、自分がそういう環境にいたということば、どちらかという1人では勉強できるようなタイプではないので、刺激にはなったのかなあとは思ってますけど。」「(先輩の姿とか見てて、影響したことはないですか。)やっぱりすごい影響しましたね。すごい勉強しているなあって。それで自分がいざ3年生になったときに、そういう先輩を見ていたので、これじゃダメだって思って。そういう先輩たちの姿が少なからず影響しているのかなと思いますし。」「(今情報システムという進路選択をしたわけですけど、そういう進路選択が寮生活と関わったりはし

てますか。) あ一進路選択に関してはそんなに関わってないですね。ただ、いろいろ先輩に相談させてもらったっていうのは助かったなと思うんですけど。」

D「俺は〇〇さん(先輩の名前)の影響はすごい強く受けているんですけど、勉強方法にしる、…。そうですね、勉強法なり高校での生活の過ごし方なり、やっぱり生きてるのが長い分、いろんな視点を与えられたかなって。」「(ちなみになぜ法学部に?どんな話し合いをして…。) とりあえず、もともとは先生になろうとしていて、教師志望だったんですけど。なんていうか学校に対する不信というか。(どんな不信?) 教師の…。やっぱり生徒のためを思っとるような振りをして、実は…。結構自分のためにいってしまうっていうか…。そういう部分が見え隠れしたっていうか。そういう部分で、自分はそうならない自信がなかったんで。まあこういうこと教師に対する不満とかを一緒に話していて、そこで教師という選択肢がなくなったりとか。まあ法学部を選んだのは、寮とはあまり関係ない話で。」「□□さん(先輩の名前)を見て、もう少し勉強しなきゃいけないんじゃないかなって。」

E「先輩を見て。そのとき受験なんて意識してないからね。(1年のときでも2年のときでも…。) 2年のときは全然見てなかった。」

A C Dは先輩の勉強する姿を見て影響を受けている様子がわかる。A「来年大丈夫かなあって。」 C「それで自分がいざ3年生になったときに、そういう先輩を見ていたので、これじゃダメだって思って。」というように、AとCは先輩の勉強をがんばって大変そうな姿から受験に対する意欲が高まり、反対にDは、先輩があまり勉強していなかった姿を見て、先輩を反面教師として自分はもう少し勉強しようと思ひ、受験に対する意識を高めている。Dは、「俺は〇〇さん(先輩の名前)の影響はすごい強く受けているんですけど、勉強方法にしる、…。」

というように、先輩から勉強方法でも影響を受けている。Bは、先輩の受験勉強する姿を見て「少し気が楽になったんじゃないかな。」と述べており、受験勉強のプレッシャーが軽減されている。

A B C Dの4人は、自分がわからないことを寮の友達に教えてもらったり、後輩にアドバイスをしたり、一緒に勉強をしたりと、お互いに学び合う姿勢をもっていたこと。Cは進路選択の際に先輩に相談をし、Dは寮の友達と「教師に対する不満とかを一緒に話していて、そこで教師という選択肢がなくなった」と振り返っており、寮生活が進路選択に影響を与えている。Eは先輩が受験勉強をしている姿を意識して見ておらず、寮生活はEの受験に対する意欲に対して影響を与えていなかった。インタビュー対象者の5人は、全員が現役で志望大学に合格している。

以上から、E以外は、寮生活によって学習や受験に対する意欲が高まったと考えられる。

## 7 家族との関係

A「(ありがたみを感じるようになったっていうのもあったんですけど、それまではありがたみを感じることもあまりなかったのですか?) そうですね。ぶっちゃけて言うとそこまで…。おって当たり前で、風呂とか洗濯もしてもらって当たり前で。してもらってしてもらってっていうので、そういうのが当たり前で、で下宿して、洗濯とかは1人でせんだめやし。しかも仕送りとか大変なもの分かってたんですけど、下宿のお金も払ってもらって恵まれてるなあっていうのは感じましたね。」「(実親と離れて、七尾から能登町までだいたい5・60キロ、物理的にはすごい離れたわけなんですけど、心の距離感みたいなものは変化がありましたか?) たまに電話とかもらうと、楽しいかなって。親とも楽しく話せる。普段離れてるから、たまに話す楽しい。けんかは少なくなった。」「(お母さん

とけんかが少なくなったって。あっお父さんもかな?) あっお父さんとはしたことないです(笑)。(そのけんかが少なくなったっていうのは、会う回数が少なくなったから必然的に少なくなったのか、それとも割合で考えたら少なくなったのか、どっちなのかを教えてください。) あったぶん、会わなくなったからなのかなあ…。(会う回数が少なくなって…。) 会う回数が少なくなって、会わないからけんかすることもなし、まあたまに何かあっても、そこは大変やってんなあと思って親がおれに優しく…。みたいな(笑)。あたまに会ったし別に怒らんとくして。たまにけんかしても、逆にそれが新鮮って(笑)。会わなくなったのもあるんですけど、親のほうがよく帰ってきたなって感じで、やさしく接してくれたみたいなき感じですね。」「たまに会ったときに怒られるのはだらしなさすぎる時に、何か言われて、いやいやいやいやちょっと待って、今休んどるだけねんからって。親が何か言って、それを聞き流すっていうのは高校行ってから覚えました(笑)。なんかこう堪えて…。堪える力っていうのは高校行ってつきましたね。(そこで堪えなかったらまたけんかになってたってこと?) もうもうもう会うたびに(笑)。」

B 「(家族と物理的な距離が開いて、心の距離の変化とかは?) 親のことを心配するようになった。病気とか怪我とか。(気を遣えるようになった?) うん。」

C 「やっぱり親元離れてわかることってあると思うんですけど、月並みですけど、僕ら例えば土日だとご飯が出なかつたり、でそんなとき自分で料理するわけですけど、まあ初めて、母親だったり料理してくれること、普段やってることってこんなに大切なんだっていうことがやっぱりわかりましたね。身にしてみてもわかったんじゃないですか。離れてみてやっぱり気づくこと、両親だったり祖父母がしてくれたことを自分ですることになって、

初めてこんなにやってもらってたんだっていう感謝の気持ちはやっぱりできてきましたかね。洗濯とかもそうですけど。」「どうしても学生のうちは大したこととしてあげてないかなってというのが今の感想ですし、社会人になった時に恩返しできるかなってというのが一つなんですけど、ただありがとうって言う回数は増えたと思います。今でもそうなんですけど、少し何かしてもらったときに、まあ電話かかってきたときに、いろんな場面があると思うんですけど、感謝の言葉を…。ああ僕成長したのかなって、まあわかんないですけど、ってまあ思ったりするんですけど。まあ照れくさいっていうのもあるんですけど、素直に言えるようになったかなって。」「今もむしろそうなんですけど、気にかけてくれるなっていうのはすごい感じているので、まあ例えば電話がかかってきたりなんですけど、気にかけてくれるなっていうのは僕の中ですごい感じているので、物理的には離れてますけど心の距離が離れたとは思ってはないですね。」

D 「親に対する…。んー。まあなんていうか、小中とあまり人がいないような過疎地域で育ってきて、で七尾へ出て、いろんな人の家庭の事情とか聞き、やっぱりうちの親は、んー、俺に尽くしてくれたなあとは思いました。(尽くしてくれたなあというのがあって、行動に変化とかありましたか。) んー、そうですね、やっぱり帰ってもあまり迷惑をかけないようにしたり、それくらいですかね。」「(物理的な距離感ではできたんですけど、心の距離感って変化はありましたか。) ないですね。全く。(会えなくて寂しいとかはなかったんですか。) ないですね(笑)。」

E 「(親元を離れて生活してみて、家族のとらえ方って自分の中で変化はありましたか。) 家族…。大学来てからならあるけど、飯とかにしても家と同じように出てきてたし。あんまり意識の変化はなかったかな。(大学来

てからはあったの?) 飯自分で作ったりせんといかんからさ。特に作ってくれるありがたみとか…。そんな感じ。(では、家族と物理的な距離はひらいて、心理的な、気持ち的な距離の変化って自分の中でどんな変化がありましたかね。) そのときのこと思い出せてことだよ、つまり。(中学校のときまでのことと…。) そんなに仲悪いわけじゃないし、意識の変化ってそんなになかったと思うけど。]

寮生活を始めて親との物理的な距離が大きくなったことから、心の距離感に変化があったかという質問に対しては、心の距離が広がった、寂しかったと述べた者は誰もいなかった。A B C Dの4人は、家族と離れたことによりそれまで以上に家族のことを気にかけたり心配するようになったと述べている。

AとCは食事が出なかったり洗濯を自分でやらなくてはいけなくなったことから、Dは他人の家庭と自分の家庭を比べることができたことから、家族を再認識し感謝の気持ちをもつようになっていく。AやCの食事が出ないというのは、土日など食事が出ないときも部活で寮に残っていたときのことである。Eは、高校生のときは食事が毎日出たが、大学生になって自分で作るようになり家族のありがたみがわかったと述べている。土日に実家へ帰ることが多かったため、AやCの振り返りとは異なると考えられる。

Aは母親とのけんかが減ったと述べており、その理由としては、「親が堪えて、たまに帰って来たんやからゆっくりさせてあげよう」としたり、A自身がけんかにならないように「堪える」ことを学んだからだと振り返っている。

物理的な距離が広がっても心の距離が広がらなかった理由として、家族のことを気遣ったり家族のありがたみを感じられる場面が、寮生活の中で多々あったことが考えられる。それによって家族に対してよい感情をもてるようになったのではないだろうか。また実家で過度に

親子の距離が近かった場合には、寮生活をきっかけに親子双方とも適度な距離感を持つことができるようになり、Aのように良い関係をもつことができるようになったとも考えられる。連絡を取ろうと思えばいつでも携帯電話を使って連絡をとることができたということも安心感につながったのではないだろうか。

以上から、清栄寮での寮生活によって親との物理的な距離はできても、寮生は家族の存在を再認識することができ、家族に対してよい感情をもったり、家族との関係をよくすることができたりしたと考えられる。

## 8 家族のとらえ方

A 「兄弟みたいな感じですかね。やっぱり。(同じ下宿で暮らしている人たちが?) はい。やっぱり長く集団生活してればしてるほど、寮のおばさんとかも第二の親みたいな感じですかね。大きく広がったって感じですよ。」「(寮には14人いて、特に先輩とかにまで範囲を広げればあんまりしゃべらない人とかもいたと思うんですけど、そういう人たちのことも兄弟だと思っていましたか。) あ〜確かにちょっとしゃべらない人は、あんまりかわり合いのない人はやっぱり、家族という感じはなかったかな。その人らは今のアパートの隣の人とかみたいなきもちもいらないですね。(今のアパートの隣の人とはどんなかわりが?) 全くしゃべらないですよ。見ても挨拶はするけど心は許していないみたいな。」

B 「(友達との距離感に違いはありましたか。)(寮のほうは) 家族みたいな感じだね。」「(寮のおじちゃん、おばちゃんから影響はありましたか。). 第二のお母さんみたいな感じはあったね。」「(寮は14人いて、先輩後輩がいて、仲が良い悪いなどもあります全員家族だと思えますか。) 仲悪くても攻撃したりするわけじゃないし、家族として見れる。みんなでご飯食べるから親近感が

わいてくる。」

C「家族…。難しいですね。ただ僕が思うのは、よくわかんないですけど、家族は家族ですよ。あの一、まあ例えばそれこそ両親とかきょうだいか祖父母とか…。それが僕にとって家族ですかね。家族のとらえ方、そうですね、もちろん当時は寮のおばちゃんだったり寮生だったりいましたし、今だと大学の部活の友達と仲がいいのかなと思うんですけど、やっぱり家族のとらえ方ってことに関して言えば、かわらないですね、ほんとに昔から。家族は家族。」(「高校時代の寮のおばちゃんとか、先輩・後輩・友達のこつとどんな感じで見てましたか。')お世話になっている人たちっていうとらえ方ですかね。もちろんすごく感謝はしてましたし。ただ家族っていうのは僕の中ではもう少し特別なものですかね。」

D「まず家族ってとらえ方が自分の中で明確でないんですけど、やっぱりその例えば、精神的に支えてもらっているとか、金銭的以外の面で今まで家族がしてくれたことの役割は、下宿の友達だったり、先輩だったりおばさんがしてくれた感はずいありました。」

E「(高校生活3年間過ごした寮って自分にとってどんな場所でしたかね。')第二の家っていうかそんな感じだったかな。(寮のおじちゃんとかおばちゃんは第二の父とか…。)いや。(そこまではいってない?)なってない。」

Aは仲のよい友達のことは「兄弟のよう」だと感じており、あまり仲のよくない友達のことは「アパートの隣の人」のような感じで、上野さん夫婦のことは「第二の親」だと述べている。Bは「一緒にご飯を食べるから親近感がわいてくる」から「寮生全員が家族みたいな感じ」と述べ、上野さん夫婦のことは「第二のお母さんみたい」だと述べている。Dは「精神的に支えてもらっているとか、金銭的以外の面で今まで家族がしてくれたことの役割は、下宿の

友達だったり、先輩だったりおばさんがしてくれた感はずいありました。」と述べており、寮生や上野さん夫婦が家族の役割を代替してくれたと感じている。Cにとっては、寮の人たちは「すごく感謝して」いる「お世話になっている人たち」であり、「家族っていうのは僕の中ではもう少し特別なもの」である。Eは寮が「第二の家」ではあったが、上野さん夫婦を第二の父や母というふうには感じていない。

5人中3人が寮生や上野さんを家族のようだと認識し、家族に対する概念を広げつつあるようにもみえる。しかし、自分の家族を再評価する面が多く、家族というものに対する葛藤がみられないことから、それまでの家族に対する概念が崩れたとは言いがたい。

## 9 自分の居場所

A「寮の友達と話しているときにもうすでに自分らしいというか、むしろそのときに自然体ですかね。(学校の友達だとそうはいかないですか?)あぁなんかちょっと、仲はいいんですけど、ちょっと…難しいなあ。なんか違うんですよ。(最初のほうに心が開けないとかっていう表現使っていましたけど…。)学校だと仲いい人はいるんですけど、そこまでしゃべらないっていうか、そういう人もいて。そういう人としゃべるときはちょっとあれでしたね。仲いい人も、なんていうかやっぱり学校だけの付き合いっていうか。僕としては、学校でだけ付き合うって人とはなかなか腹割って話せないんで。(学校と寮の友達比較したら…。)やっぱり絶対寮のほうが安心してって言うか、自然体で…。(自分らしくいれる。)そうですね。気遣わんって言ったら変なんですけど、気遣うんですけど、ありのまま話せるっていうか、思ったことをそのまま伝えるって言うか。」「(寮での居場所と実家での居場所って何か違いはありますか。)ほとんどない気が…。違わない気が…。実家帰ったときに、人が少ないんで寂し

い感じはありました。」

B 「(寮の中に自分の居場所があるっていう感じはありましたか。) うん自分の部屋。まあほとんど△△(友達の名前)に占領されとったけど。(それは空間があるってことでほっとするのか、それとも仲のよい友達がいるってほっとするのか。) 両方なんじゃない。」「だいたい自分の部屋自体なかったし。(あつ部屋なかったんや。) 寮生活始めて自分の部屋ができて、プライベートが…。(そういう意味ではよかったのかな。自分の部屋をもって意識に変化はありましたか。) なんやろ…。隠し事ができるとか? 普段やったら人の目を気にしてできんこととか。」「寮のほうで自分と向き合える時間が多いかなって。」

C 「自分の部屋に入れば、そこは自分の空間だったので、そういう意味で、落ち着ける場所ではあったのかなあとと思います。(ほっとするとか落ち着けるっていうのは、1人一部屋自分の部屋があたっていて、自分の部屋っていう空間があったから落ち着いたのか、それとも知り合いや友達がいるから落ち着いたのかっていうのを考えると、どうですかね。) 両方ありましたね。自分の部屋もそうですし、帰ってきたら帰ってきたで先輩でも後輩でも、普段学校で気を遣わないとだめな部分もあるんですけど、もちろん寮の中でもあるんですけど、それでも気兼ねなく話せる部分だったり、その一、他愛もない話をできるっていうのはすごい自分にとっては大きかったですね。」

D 「(寮は自分の部屋があるし、友達もいるから居場所があるというようなことを言っていたんですけど、実家へ帰ったときってどうですかね。) 実家はまた別の意味でほっとしますね。(その二つを比べると自分の中でどういう違いがありますか。) 違い…。んー、どういう違い…。やっぱ本当の家族がいる安心感っていうか…。逆に下宿帰ったら友達がいるという…。二つを比べるとやっぱり下宿の

ほうは友達って感じなんで。」

E 「(寮に帰って、ほっとするとか…。そういうのってありましたか。) 1人になれるっていう意味ではあったやろうけど。(自分の部屋が、1人一部屋あるってことでほっとするのかな。) ああまあそうやね。(誰かとしゃべれるとか。) ああそういうのは…。(全然ない?) 全然ではないやろうけど、そんな意味ではほっとはせんかな。」

ABCDの4人は自分の部屋があるということ、話せる友達がいるという2つの面で寮に居場所があると感じており、Eは友達がいるというよりは自分の部屋があるということに寮に居場所があると感じている。

家での居場所との比較に関しては、AとDは寮だと友達がいるということではほっとできると述べている。Bは実家に自分の部屋がなかったため、寮生活を始めてから初めて自分の部屋ができ、プライベートな時間や自分と向き合う時間をもつことができたことと述べている。Eは実家だと住み慣れた場所であるということと、家族がいるということに居場所だと感じている。

以上から、親密な友達がいることと、自分の部屋があることによって居場所があると感じることができたと考えられる。

## 10 親子関係でのストレスやプレッシャー

A 「ほんと気を遣ってもらってるんやなっていうありがたみがわかって。でもやっぱり、どっかに、親から離れられたっていう解放感がやっぱり。親から人より離れてるのが早かったんで、大学来てからもやっぱり1人暮らしの生活に抵抗感なく入ってけてよかったです。(今解放感っていう言葉がでたんですけど、家族から離れる前は解放感はありませんでしたか?) てかないです。(どういう面でそういうことを感じましたか?) やっぱり、どこに行くにしても、今日はどこに遊びに行って、何時くらいに帰ってくるのかということを書いて、それを守らなかつたら怒

られたりしたんですけど、でもやっぱりもう離れたんで、どこ行くにしても勝手と言ったら悪いんですけど、誰にも邪魔されず行きたいところに休日は行ったり、友達と夜遅くまでしゃべっていても寮にさえ迷惑かけなければ大丈夫。」

B「でもやっぱり広くとらえたらさ、(家族は(著者注。以下同じ))狭い人間関係の中やとすごい密着になりすぎて大変かなって。そういう広くとらえることによって、ちょっと気が楽になるかなって。(それは自分の考えですか。それとも実際そういうところがあったんですかね。)実際そうやったんじゃない。」

C「家にいるとまあ、同じようなことなんですけど、早く風呂に入りなさいとか、早く着替えなさいとか、やっぱり今でも実家帰ると言われるんですけど、帰ってきたんだから今日ぐらい早く寝なさいとか言われるんですけど、そういう意味では、(寮に入って)ちょっと楽になったのかもかもしれませんね。まあでも離れても電話はかかってきますからね、でも多少は楽になったかもかもしれませんね。」「寮にいるときは早くお風呂に入りなさいって言われてたんですけど、やっぱりあのとき(寮では)はどうしても迷惑かけてしまうじゃないですか。遅くなれば遅くなるほど。そういう意味で誰かにいつも、寮のおじさんおばさんに迷惑になるっていうのはわかっていたんですけど、それでも何かなー(わかっていても面倒くさい)っていう思いもあって、(寮での)ストレスになっていました。家にいるときは、いつも言われることじゃないですか、早く風呂、早く寝ろって。まあ実際中学生の頃も早く寝なさいってよく言われてましたし、いつも。そういうように小さい頃からいつも言われていることだったので、習慣じゃないですけど、ストレスと言えばストレスかもしれないんですけど、あんまり…。聞き流していたみたいなどころあるので、そう

いう意味で、寮ではほっとくわけにはいかないので。そういう違いはあったのかなって。」

D「やっぱり(自分に)甘える部分がどうしても出てくるようになったんですけど、まあその都度今の姿を見たら、間違いなくなんか言われるだろうなって。でやっぱりそれは正しくないんだらうなって。その前のその幼い頃の出来事がインセンティブというか何というか、きっかけになって、自分の行動をある程度律するきっかけにはなったと思います。(こう言われなくなったから、その分楽になったとかそういうのはあまりなかったですか。)ないですねー。」

E「あつてもゲームの時間は制約があった。寝る時間とか。(寝る時間とかは中学生になっても一緒?)まあはっきりとは決まってないけどね。早く寝ろってうるさかった。(そういう面では寮で1人暮らしするとかなりラクだったのかな?)もうラクやね。」「(家が時間の面とかがうるさくて、それが高校で1人暮らし始めたら、束縛されなくなったってことでは、そういう面での解放感みたいなものは…。)うん、あつた。若干じゃなくて、あつた。(かなり?)うん。(その解放感って自分にとってよかつたと思う?悪かつたと思う?)よかつたと思うよ。(それはどういう面でそういうふうに思いますか?)ストレスたまらんし、好き放題できたから。」

AとEは解放感があつた、Bは気がラクになったと述べている。

Aは、実家だと帰る時刻などを告げてから家を出て行きそれを守らなければいけないというルールがあつたが、寮では他人に迷惑さえかけなければ何をしてもよくなつたことに解放感を感じている。Eは実家では就寝時刻が決まっておろうるさく言われたが、寮ではそれがなく、ゲームを好き放題できたことに対して解放感を感じている。Bは、実家では今やろうとしていたことを親に指摘されることに対してス



トレスを感じており、寮では親がおらず指摘されないことや人間関係が広がったことによって気がラクになったと述べている。

Cは気がラクになったと言いながらも、実家で親がお風呂に入りなさいと言うのは聞き流せるが、寮でお風呂に入りなさいと言われることに対しては、迷惑もかかるので入らなくては行けなかつたということから、気がラクになったことに対して大した違いはないと述べている。

本調査対象者の親は、中高生の子どもに対し、日常生活の行動や時間管理などこまごまとした注意や指導を行っていた。この状況は本調査対象者に限らず、多くの日本の親に言えることと予想される。寮生活をする中で、親の管理がなくなり自由になったことによって、対象者は解放感を感じたりストレスが軽減されたと考えられる。またBが述べるように、家族が密着しすぎず、人間関係が広がることによって家族のストレスやプレッシャーから解放されたり軽減されたりすると考えられる。

## V まとめと課題

調査結果を、仮説に沿って4点にまとめる。

(1) (仮説1) 寮生活によって、コミュニケーション能力を身につける、親密な友達ができるといった、社会性を向上することにプラスに影響していた。自分の部屋があること以外に、友達がいるから自分の居場所があると感じていた。寮では、同級生や先輩後輩と他愛のない話から進路・相談事まで様々な話ができる関係が築けていた。本音を話すことができる場であり、話すことにより不安を取り除いたり安心感を得たりしていた。勉強では競い合うのではなくお互い教え合い学び合う関係ができていた。逆にいえば、普通の学校生活では、友達と真剣な話をしたり気兼ねなく話をしたりすることが困難な状況にあると推察される。勉強を通して互いの関係性を深めることは、進学校の生徒特有の関係性の持ち

方であると考えられる。

本調査では、Eが寮の友人と特別な関係を築けたと認識しておらず、コミュニケーション能力が身についた、先輩の姿を見て学習に対する意欲が向上したとは感じていない。親密な友達とまでは言わないでも、話す友達がないような状況に置かれる場合には、寮での生活はかなり居心地の悪いものになるだろうと考えられる。Eは好んで1人でゲームをしていたが、これはEからすれば、他人との関係よりも自分の好きなことに価値を置いていただけなのではないかと考えられる。また受験に対してあまり興味がなかったために、受験をしている先輩に対して関心をもたなかったのではないかとということも考えられる。短絡的にEの社会性に問題があるというわけではない。Eにとってはまわりの寮生の文化が特殊でなじめない部分もあったのではないかとと思われるが、この点を明確にできず課題として残った。

- (2) (仮説2) 掃除や洗濯、食事がないうきには自分で食事を用意するといった生活面での自立や、親から離れて自分で選択したり決定したりする機会が増えたことによる精神的な自立を、寮生活は促すことができた。自分のことは自分で考え自分でやるという意識が身についたと思われる。今日の日本では、親元にいると、多くの中高生はこのような自立の機会を奪われる可能性が高いといえる。
- (3) (仮説3) 進学校の生徒たちにとって受験勉強は大きな関心事であるが、寮生は激しく競争し合うわけではなく、お互いに学び合うことで受験勉強に対する意欲を向上させ学力を身につけていた。先輩の姿を見て自分の将来の姿と重ね合わせることによって受験に対する不安を取り除いたり、先輩や同級生から教えてもらうことによって学力を向上させたりしていた。
- (4) (仮説4・5) 寮生活により親子関係に物理的な距離ができ適度な距離感が生じること

によって、家族を再認識し親子関係が良好に変化するきっかけになっている。家族に対して感謝の気持ちをもったり、家族の健康を気遣ったりできるようになり、家族を再認識していた。親との距離が近すぎて親の存在がストレスになっている場合には、親から離れることによって解放感を得ていた。寮生や上野さんを家族のようだと認識し、家族に対する概念を広げつつあるようにも見える。一方で、自分の家族を再評価する面が多いことや、家族というものに対する葛藤がみられないこと、寮のある地域との交流がほとんどないことから、それまでの家族観が揺らいだり、近代家族を超え開かれた家族を指向したりするまでには至っていないといえる。

本研究は家族外コミュニティの可能性を探る一研究である。寮経営者へのインタビューや女子の場合、他寮の場合、進学校でない場合等の観点を取り入れ、今日の社会や家族にとっての寮という家族外コミュニティの意味や課題をさらに検討する必要がある。また、寮以外の様々な家族外コミュニティの多面的・普遍的な可能性を探り提案していく必要があるだろう。

なお、本稿では「高校寮」を「家族外コミュニティ」の1つとしてとらえたが、「コミュニティ」ととらえることが妥当なのか、他の用語が適当であるのかは課題として残った。今後検討していきたい。

#### 【注】

注1) 一般には、大正期の新中間層に端を発し、子ども数を意図的に制限し、少ない子どもを愛情をかけて大事に育て、子どもの教育に積極的に取りくむ家族という意味で用いられる。

注2) 石川県七尾市和倉の旅館加賀屋の従業員用の託児付き宿舎で、長時間保育、早朝・深夜保育、病児保育、学童保育など、ゼロ歳児保育を除いて日本の保育行政の欠陥が満たされている<sup>11)</sup>。

注3) 石川県加賀市山代温泉共同浴場前にある施設であり、非営利活動市民団体はづちをがスタッフやボランティアで運営を行っている。はづちを楽堂のある地域には山代温泉があることから、温泉街で働き夜型の生活をする親が多いため、子どもの食事を親が作るのが難しい現状がある。はづちを楽堂はこうした子どもたちのために朝食を提供することを有料サービスの一つとして行っている<sup>12)</sup>。

注4) 三重県鳥羽市答志島答志地区の日本で唯一残存する寝宿制度である。男子が中学校卒業後に地区の特定の大人と「寝屋子ー寝屋親」の関係を持ち、寝屋子の解散(約28歳)まで寝屋親の家で集団で寝泊りをする。寝屋子の解散後も寝屋子ー寝屋親、寝屋子ー寝屋子の関係は続き、一生の付き合いをする。寝屋子はしつ的な機能や親密な人間関係をつくる機能をもっている<sup>13)14)</sup>。

注5) 千葉県習志野市立秋津小学校では、秋津コミュニティとして高齢者から子どもまで老若男女が集まって活動を行っている。活動を通して、母親だけではなく父親や地域の人たちが子どもを育てることができており、子どももその中で自信や社会性を身につけながら育っている<sup>15)</sup>。

#### 【引用文献】

- 1) 小玉亮子「教育改革と家族」日本家族社会学会『家族社会学研究』No.12 (2) p.185~196 2001年
- 2) 本田由紀『「家庭教育」の隘路』 p.3~18 2008年
- 3) 松田洋介「現代の育児雑誌と家族の教育戦略」教育科学研究会編集『教育』国土社 p.28~35 2008年
- 4) 須永和宏「生きづらい時代の子どもたち」須永和宏編著『子どもを救う「家庭力」 臨床現場からの提言』慶應義塾大学出版会 p.19 2009年
- 5) 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』

- 講談社現代新書 p.127～147 1999年
- 6) 岡邊健「非行と家族の関係を問い直す」  
広田照幸編著『〈理想の家族〉はどこにあるのか?』教育開発研究所 p.149 2003年
  - 7) 落合恵美子『21世紀家族へ 第3版』有斐閣選書 p.50 2004年
  - 8) 前掲書4) p.30
  - 9) 佐藤春雄「V学校と地域社会」葉養正明編『教育の制度と経営 四訂版』学芸図書株式会社 p.79,80 2008年
  - 10) 綿引伴子・中田淳平「「高校寮」という「家族外コミュニティ」の可能性—親へのインタビュー調査をもとに—」金沢大学学校教育学類附属教育実践支援センター『教育実践研究』第36号 p.19～29 2010年
  - 11) 上野千鶴子『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』平凡社 p.126～128 2002年
  - 12) 『厚生福祉』2003年2月18日 p.10
  - 13) 宮前耕史「寝宿における人間関係と「老い」答志町答志の事例から」国立博物館「国立歴史民俗博物館研究報告」第91集 p.380 2009年
  - 14) 横浜勇樹・上野利三「三重県答志島の「寝屋子」にみる持続可能な地域コミュニティ形成に関する研究」三重中京大学地域社会研究所『三重中京大学地域社会研究所報』第21号 p.107～125 2009年
  - 15) 川崎末美「地域社会に家族を開く—子どもの社会適応力を育てるために—」須永和宏編著『子どもを救う「家庭力」』慶應義塾大学出版会 p.81～120 2009年